

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-12-14

ベルクソンにおける言語の問題

大東, 俊一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

66

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

73

(発行年 / Year)

1988-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005348>

ベルクソンにおける言語の問題

大東俊一

ベルクソンの哲学はしばしば言語不信・言語批判の哲学と言われる。実際、最初の主著『意識に直接与えられているものについての試論』（以下『試論』と略記）の序文は次の言葉で始まっている。

「我々は自分の考えを必ず言葉によつて表現し、またたいていの場合、空間の中で考えている。言いかえれば、言語は我々の持つ諸々の観念の間に、物質的対象の間と同じはつきりとした明確な区別、同じ不連続を設定するよう必要とする。」（D. I, 8）

ベルクソンによれば、この要請は実生活や大部分の学問において必要なものであるが、本来空間を占めていない諸現象を空間の内に並置することによって、ある種の哲学的問題を克服し難くしているという。

言語に対する不信表明はこれに留まることなく、以後ほとんどの著作において、ベルクソンは、言語が社会生活の有用性のために持続（la durée）を空間化し、歪曲してしまふと繰り返し抗議した。しかし、言語によつて持続を表現することが不可能であることを主張することできえ、言語によつてしかなしえない以上、そこにある種のバラドックスを指摘する向きもあるが、まずは、上述のような言語不信がどのような言語観に根ざしているのかを確認する必要がある。

ところで、ソシユール以降の現代の言語学は、言語を社会的制度と見なし、言語の自立性を思考過程とは独立の過程として要請している。その結果、言語の社会的拘束力ということが強調され、言語に先立つ一般的觀念は存在せず、言語以前には何一つ明瞭に識別されることはないとされている。ソシユールによれば、心理的に言語を捨象して得られる觀念などは恐らく存在せず、「あるいは存在しても、無定形と呼べる形のものでしかない」わけである。要するに我々の意識は言語による分節化を経なければ、「一種の形を持たない星雲のごときもの」に留まるのである。それゆえ言語学は形而上学を捨て、内観の方法に基づく心理学を退け、科学に立脚しなければならないとされるわけだが、それにもかかわらず疑問はまだ残る。もとより言語による分節化によつて初めて実在は実在として明瞭に呈示されるという主張を認めるにやぶさかではないが、それだからといって顯現する実在を背後から支える「星雲のごときもの」への考究を停止してよいということにはならないであろう。言語の分節化作用にのみ目を奪われて、それを支える地盤を顧みないのは一面的に過ぎるのではないか。たとえ現代の言語学がいかに科学であることを標榜しようとも、依然として存在の問題は残つてゐるのではないだろうか。

ベルクソンの言語觀を言語道具説だとして非難し去ることはやさしい。⁽³⁾ 実際、ベルクソンは、意識に直接与えられているもの、絶対的な実在を目指して探究の道を歩む過程で、言語は持続を空間化し、社会生活の有用性に奉仕するものだとして批判を続けたからである。しかし、彼の哲学体系の全体像を視野に入れるとき、その言語觀の要は言語と非言語、言語と実在との連関を明らかにすることにあるというのが筆者の見解である。このことを明らかにするのが本稿の目的であり、それは同時に言語学における形而上学の果たす役割の追求でもある。とは言うもののベルクソンには言語を主題的に扱つた著作はないし、まとまつた論攷も残されていない。まずは様々な著作に散見される言語に関する考察をとりあげ、彼の言語觀を再構成することから始めよう。

上

ベルクソンは『試論』の随所で、我々の精神生活が個性的であるのに、言語は内的状態の共通な側面しか表現することができないと繰り返し告発しているが、このよらな事情は言語のどのような性格に由来するものであろうか。言語が何か共通的なものしか表現しえないといふ、即ち、諸事象を一般化するものであるとの由来を、我々はベルクソンが『物質と記憶』の中で一般観念 (*l'idée général*) を論じている箇所に求めることがあるだろう。ベルクソンは『試論』においては持続の概念の確立を急ぐあまり、言語に対しては単なる不信表明に終わっていたが、『物質と記憶』においては言語の発生を論じることになる。

ベルクソンによれば、一般観念は唯名論者の言うよらな別々の対象を無差別に指示する記号の同一性に由来するのでもなく、概念論者の言うよらな個別的対象から抽象される共通な内包に由来するのでもない。一般化するためにはまず抽象することが必要であるが、有効な抽象を行うためには既に一般化することができなければならぬから、両者は互いに循環する運命にある。一方、ベルクソンは一般観念の基礎を、意識的な命名や抽象ではなく、「特徴的性質あるいは類似の漠然たる感じ」 (MM, 176) に置く。もし、知覚に統いて同じ反応が起こり、有機体がそこから同じ有益な効果を引き出し、知覚が身体に同じ態度を刻印するのであれば、そこには何か共通なものが生じるであろう。一般観念は表象される前にまず感じられ生きられているのである。自然発生的に抽象されたこの類似に記憶力が差別を加えて個体の知覚を構成するのに対し、悟性は漠然たる類似から一般観念を取り出す。そして、いたん一般観念が構成されると、今度は意図的に無数の概念が構築される。ここにおいて悟性は人為的な運動機構 (*des appareils moteurs*) を組立てることによって、無限に多様な個別的対象に対し有限数の反応をさせるのであり、この機構の総体が有節言語 (*la parole articulée*) である。

このような次第であるから、言語は共通的なもの・一般的なものしか表現しえないことになるが、ベルクソンに

あつては、以上のような言語発生論がそれ以後も維持されていくことになる。

といひや、一般化するところをいは、動物などにも見られるが、しかし、言語は先立つて存在するわけだが、ベルクソンによれば、言語の特徴はその一般性(généralité)よりもむしろ可動性(mobilité)にあるといふ (cf., EC, 159)。人間は社会を成して生きているが、昆虫の社会のように各個体がその構造によって予め果たす役割が決定されているわけではないで、各個人は社会におおむね自由の役割を選びとつていかなければならぬ。それゆえに絶えず既知のものから未知のものへ移るといふ可能にしてくれる言語が必要にならざるわけである。即ち、語(mot)は知覚された事物からその心像(image)へ、やひど、「心像を表象する働きのもの」の表象」 (E C, 160) やある観念へと拡がつていくのである。

このような記述からして、ベルクソンの言語観は言語名称目録説と見なされても致し方ないが、彼の言語発生論が知性の問題と深く関連していだことは指摘しておかねばなるまい。ベルクソンによれば、語のこのような可動性のおかげで、当初は道具を製作することを役割としていた知性も、利害を離れて自己の歩みを反省し、観念の創造者、即ち、表象能力一般としての自己の姿に気がつくのである (cf., EC, 160)。ベルクソン流に言えば、言語は知性を目前の関心から解放するのに貢献したところになるとなるが、言語の側からみると、語の可動性は一般性の裏返しに過ぎない。即ち、言語そのものは事物を指示するようを作られており、それ自身もまた事物に過ぎないから、知性が事物ではない或る対象に新たに語を適用すると、その対象は直ちに一般性の刻印を押されてしまうのである。我々各人が自分流の愛し方や憎み方を持ち、その愛情や憎悪が各人の全人格を反映しているのに、言語はいれの状態をどの人の場合にも同じように表わす、といふ『試論』で述べられてくる事態 (cf., DI, 123) の由来がここに見出しうるのである。あるいは、語が観念まで拡がるという事態にして、これが意味するゆのは、結局のところ、観念それ自体も一般性の刻印を押された何か共通なものしか表現できない、といふことやしない。

以上のような論述からは言語の否定的側面しか浮かび上がつてこないようであるが、言語が我々人間の創造的進化において果たした役割について、ベルクソンは比較的肯定的な評価を下している。彼によれば、人間が世界のた

だ中に現われ、自然の種々の物理的運動を変貌させることができたのは優秀な脳のおかげである。言語は「意識に受肉の場として非物質的な身体を提供し、意識をして専ら物質的な身体のみ依存しないでもすむようにさせる」(EC, 265) のである。この点を捉えてメルロ・ポンティなどは、ベルクソンが言語について批判的に述べたことが、彼が言語のために弁じたことを忘れさせているとして、「紙の上や空間の中に固定されて非連続的な要素となってしまった言葉(*langage*)があるとともに、思考の等価物でもあり対抗物でもある生きた言葉(*la parole vivante*)も存在し、そのことはベルクソンも知っていた」と述べているが、⁽⁵⁾上述のような事態に関する評価としては少々不適当であるようと思われる。というのも、言語が意識に受肉の場として非物質的な身体を提供するところと自体は、人類の進化に大いに貢献したであろうが、共通的なものしか表現しえないという言語の性質は、そのことによつて何ら変更を受けるわけではないからである。ベルクソンによれば、言語の原初的機能は「協働のための意志疎通の確立」(PM, 86) であり、言語は有益な効果をもたらす様々な事象を同一の観念のもとに包括するものであった。言葉や観念も進化することであろうが、共通的なものを表わすという功利的・社会的性格は依然として支配的であることをベルクソンは認めているのである。

(1)

それで、以上のような言語発生論は、ベルクソンの言語觀を道具説であるとか、名称目録説であると批判する現代の言語学に格好の言質を与えるようであるが、そこにおいてベルクソンが現代の言語学が等閑に付している言語の存在論的基礎をも問題にしていることを忘れてはなるまい。

「ベルクソンは記憶力(*la mémoire*)と同じ仕方で言語を分析している」というジル・ドゥルーズの指摘を待つまでもなく、我々が人の話を理解する仕方はひとつの記憶(*souvenir*)を見出す仕方に等しいとするベルクソンの見解にまことに注目しよう。また、この際、ベルクソンにおいては、記憶力とは精神の単なる一作用ではなく、すぐれ

て精神そのものであることに留意したい。そこにおいて、過去とは活動をやめ、有用性をなくしたまま、存在がそれ自体で保存されている即、自存在であり、いかなる意味においても心理的自存ではない。「純粹記憶(souvenir pur)」が無力、潜在的、非延長的などと形容されるのゆえのためである。

いわゆる、「我々が記憶を呼び戻そうとする場合、「我々は現在から離脱してまず過去一般 (le passé en général) のへん、へんや過去の或る一領域に身を置かなければ、特殊な働きを意識する」(MM, 148) が、この段階では記憶は依然として潜在的状態にありて、あるいは「心像的記憶 (souvenir-image)」へと現実化しなくてはならない。いわゆる初めて、心理が行われるわけであるが、この局面には、この運動が同時に関与する。即ち、「並進運動 (translation)」へ「自転運動 (rotation sur elle-même)」(MM, 188) である。前者は現在の状況からの呼びかけに応答し、或る記憶とそれを含む過去の全てのノウハウを統合した不可分な表象を記憶力にもたらすために収縮する運動であり、後者は前者によって定位した水準から現在の状況に最も役に立つ側面を差し向ける運動である。そして、「純粹記憶」の現実化の最後の段階にあるのは、「心像的記憶」と知覚とが流れ込む共通の枠組である「運動図式 (le schème moteur)」であって、この図式は「それ自体身体的態度に挿入された一種の精神的態度」(MM, 134) なのである。

いわゆる、「純粹記憶」の現実化が完了するわけであるが、ベルクソンにあひては、知覚から記憶へと向かうのではなく、記憶から知覚へと進む過程が実在的であるとされていふ。換言すれば、記憶が現在の状況に先行しているのである。

いわゆる、「ベルクソンにあひては、このよな記憶の現実化の過程は、我々が話し言葉を理解する過程と並んである。即ち、「聴き手は対応する諸観念の中に、一気に身を置き、それらを聴覚的表象 (représentations auditives) へと展開するのであり、聴覚的表象は運動図式に自らはまり込む」と、知覚されたままのゆとの音声に覆いかぶさる」(MM, 129) のである。通常は耳から入ってくる音声が聴覚的表象を呼び起し、聴覚的表象がさらに観念(=意味)を呼び起すと考えられているが、ベルクソンに言わせればそれは逆なのであつ

い、我々はまず観念(=意味)の領域に一気に身を移すのである。これをドゥルーズ流に言えば、「存在論への飛躍 (le saut dans l'ontologie)」といふことにならうが、ベルクソンにおいては、意味は聴覚的表象への展開を待つて初めて心理的存在になるのである。いよいよおいて我々はベルクソンの言語観に意味の超越性というものを認めるだけではなく、言語の存在論的基礎を問題にしうる地平を見出すのである。ベルクソンは言語の完成された状態の分析から始めたのではなく、社会的制度としてのラシタの諸形態のもとにあらわば内的な铸型を問題にしたのであって、それを「力動的図式 (un schéma dynamique)」に求めたのである。この「力動的図式」こそ「多数のイメージ」に展開しうる単純な表象」(ES, 161)であり、記憶の現実化の過程において「並進運動」によってもたらされるあの不可分な表象に等しいであろう。また、この過程とパラレルな関係にある話し言葉の理解の過程において、この図式はさまざまに聴覚的表象へと展開する以前の統合された諸観念に対応するものであろう。我々はこの「力動的図式」によって超越的な意味から現実の知覚へと赴くことができるわけであり、そのおかげで外的な言葉を理解し、習得することができる。前述した有節言語の起源を一般観念に求めるベルクソンの言語発生論は、言語を解釈し、形成するいふことによってその扱い手となる内的な铸型の存在論によって補完されるのである。

III

さて、以上のような言語観に基づくかぎり、一般的なもの、共通的なものしか表現しえないという言語の性質は依然として変更を受けないわけだが、ベルクソンの言語批判が知性批判と深く関係していることを指摘しておかねばなるまい。ただし、ここで注意しなければならないのは、彼が批判の対象とした知性のレヴィルの問題である。ベルクソンも認めるように、我々の思惟はその起源から直観的なものと知性的なものを併せ持つてゐる。その原初的機能からすれば、空間における人間の労働を組織立てることを目的とする言語は、社会が利用すべく物質に対する精神の極めて一般的な順応であるゆえに、それを司る知性は「曖昧な知性 (l'intelligence vague)」(PM,

87) やある。マルクソンはいふる「一般的知性 (l'intelligence générale)」(PM, 89) は「*一般的な知性*」は言葉を適切に操つて日常的な諸概念を組み合ふやうな、*蓋然的な経験を示す抽象概念*。マルクソンが批難していふるの以上のような知性やも、*純粹知性 (la pure intelligence)*」(PM, 92) は知性のみに依存する問題 (= 物質に關する問題) に關つては、「原理上、絶対 (un absolu) は盡る」(PM, 84) はすだとされるのである。やがて「*純粹の進化*」における知性と物質の同時発生論 (cf., EC, 201-) が前提となつて、「純粹知性」がいかに精密な symbol を用いたとして直観の内容を述べるが、やがて「純粹知性」がいかに「*言語*」が「*直観*」とは何のかわりはない。

マルクソンは言語を単に実用的見地から現実を裁断するものと見なすだけではなく、言語の社会的根源のせばは彼の言ふところの直観の光も宿つていて、そこから詩や散文芸術が誕生したことを語るが (cf., PM, 87) やれならば直観と言語との関係を彼はどうに考えていたのだろうか。

言語は行動のために現実を裁断するものであり、安定性・固定性を必要とする。語(mot)は比較的固定した意味を有し、「古ふるものとの置換えとしてでなければ新しいものを表現することはやがて」(PM, 89) いいや支配的なのは保守的な論理であり、そのような論理では何ら新しいものを創り出すことはやがて」マルクソンは「*言語を*」のように批評する。一方、「直観的に考えるとは持続において考えらる」(PM, 30) であった。直観はやがて我々の内的持続に向かい、内的生命の不可分な流動を把握する。直観とは「精神によつて精神を直接見る」と (PM, 27)、「接觸であり合一である認識」(PM, 27) やあつた。直観はいつて本質的なものは変化であり、直観は持続を注視し、やがて予見不能な新しいものの不斷の創造を見出す。

直観がかようなものであるとするならば、それを表現する言葉が既成の言葉の中から見つかるところとはせどんとありえない。一方、直観は苦しい努力であり、長続きはしない。とはいえ、直観は言葉によつてしか伝えることができない。いじらかつのアボリアがある。直観を伝えようとする哲学者の側からすれば、言葉を直観にひつたりとねらむのをするには、その意味を曲げなければならない。哲学者の精神は唯一にしていいかに見える

何かに一挙に到達したわけだが、この「かたるや、「予め語の中に与えられた多様にして共通な概念のうちになんとかして自らを開陳しようとする」(DS, 44)のである。かくして、哲学理論は既成のものの單なる配置換えではなく、独自の直観の共通的概念への展開ということにならうが、直観も思惟であるかぎり、最後には諸々の概念の中に宿らねばならないことはベルクソンも認めざるをえない。彼によれば、思惟はそのままでは相互融合の状態を呈していて、そこには渾沌があるだけである。思惟が明確になるためにはいくつかの言葉に分散しなければならず、「我々は互いに浸透していた言葉を紙の上に書き並べたときに、初めて自分の精神の中にあったことをはつきりと知ることができる」(ES, 22)のである。直観されただけの思惟は哲学の名に値せず、それが理論化されて初めて真の意味での哲学となるのである。

このようなベルクソンの論述を見るかぎり、いかに彼が直観の重要性を強調したとはいって、論理を軽視したという批判が不当であることは容易に納得しうるであろう。ベルクソンは言語の働きを批判する一方で以上のよう直観を定義し、意識に直接与えられているものを探求していくわけだが、ここでひとつ疑問が生じるかも知れない。即ち、前述のように、ベルクソンは言語の存在論的基礎を問題にしようとしたとはいって、言語の働きを不適に切り詰めてそれを批判する一方、言語現象に先立つ直接的現象を想定し、それとの合一を直観に託したのではないとかというものである。なるほど、ベルクソンは直観を明確にするためには言語の働きが必要であることを説きはしたが、その場合とて言語は述定されるときにしか現われないわけであり、最前からのベルクソンの言語評価は依然として変わっていないよう見える。たとえ直接的なるもの・絶対的なるものを把握することができたとしても、それを顕在化する何らかの作用がなければ、何かを直観したとさえ言えないであろう。直観と言語とを媒介するものを何と命名するかは別として、前述の疑問にも答えるべく、ベルクソンの哲学体系全体からさらに言語観を検討することが必要である。その過程を通して、言語観の形成において形而上学の果たした役割も浮き彫りにされるであろう。

四

れて、ベルクソンによれば明晰性 (clarté) は一種類の (cf., PM, 31)。まず、新しい観念が明晰でありますのは、その観念が既に我々が熟知している要素的諸観念を配置しなおしたものだからである。これは知性的認識のなせるわざであり、通常の言語によってもたらされるものである。もうひとつは、根本的に新しく絶対的に単純な観念の明晰性であるが、直観から生じたそのような観念は構成要素を持たず、既存の諸観念をもって再構成することができないので、通常は逆に不明瞭であると見なされる。そこに直観の表現という問題が生じてくるわけであるが、通常の言語によっては表現できないことは言うまでもない。通常の言語が古いものとの配置換えによって「が新しいものを表しえないとすれば、そこにおいて支配的なのは「回顧の論理 (une logique de rétrospection)」(PM, 19) である。この論理は現存する諸事物や諸事象を可能性または潜在性の状態において過去の中へ投入するものであり、これによればあらゆることが以前から可能であつたということになつてしまふ。諸事物や諸事象は或る一定時に発生するものであるが、それらの出現を確認する判断はそれより遅れて到来するものであり、それ 자체は日付を持つていて。しかし、真理は永遠であるという知性に深く根ざした原理によってその日付は消失し、真なる言明に遡及的効力が付与される。現在において現実に生起するものを可能性・潜在性という形で過去へ押しやるのには、創造といいうものを認めないからであり、換言すれば、眞の持続は存在しないという誤った確信を抱いているからだとベルクソンは批判している。それならば、一体ベルクソンはどのような論理が必要だと考えていたのだろうか。彼によれば、「この論理 (=回顧の論理) を放棄したりこの論理に反抗したりするのが問題なのではない。」この論理を拡大し、柔軟化し、新しいものが不斷に噴出しそこでは進化が創造的であるような持続にこの論理を適応させなければならない」(PM, 19) のである。しかし、このように述べる割にはベルクソンはこの「回顧の論理」を執拗に反駁するばかりで、論理の拡大・柔軟化ということに関してはあまり言葉を費やしていないというのが実

情である。ただ、これまでのことを考慮するならば、『思想と動くもの』の「緒論第一部」に彼の目指す方向を示唆してくれる言葉を見出すことができるである。そして、これは同時に前述の直観と言語との関係という問題をも照らすものである。

それによると、直観が観念を超えたものであるとして、観念の助けを借りなければ自らを伝えることはやきない。そのために直観は最も具体的な観念、即ち、心像(*image*)に取り巻かれた観念を用いるが、そこにおいては、言葉では表現できないものを直喻(*comparaison*)や隠喻(*metaphore*)が示唆している。いわゆる科学的な抽象概念は外界から抽出されたものであり、空間的表象を含んでこそ、それを用いるとかえって別のものによる置き換えをすることになってしまい、本来の意味での比喩になってしまう。「イメージ」を伴う言語(*le langage image*)の方が意識的に本来の意味で語っており、抽象的言語の方が無意識的に比喩的な意味で語っている場合もある」のであり、「心的世界に取り組むや否や、イメージは示唆しようとすると過ぎないとしても、我々に直接的な注視(*la vision directe*)を与える」のである(PM, 42)。

ベルクソンの「イメージ」を単なる「心像」とか、修辞上の文彩などと見なしてはならない。そのように考えなるならば、ベルクソンの言語は依然として画一的に諸事象に反応することによって言語共同体に奉仕する硬直した体系に留まるであろう。ここで我々は『物質と記憶』の思想圈に立ち戻らなければならない。その序には、「イメージ」というものを、我々は観念論者が表象(*représentation*)と呼ぶものよりもまさって、いるが、実在論者が事物(*chose*)と呼ぶよりも劣っている存在——「事物」と「表象」との中間にある存在——と解する」(MM, 1)とある。ベルクソンの知覚された存在に関する記述を捉えて、「存在は観客である〈私にとって〉あるのだが、逆に、観客は〈存在にとって〉あるのだという存在と私との回路はこれまで十分に確立されたことがない」(11)とあるベルロリボンティの指摘を待つまでもなく、ベルクソンが「イメージ」という概念装置を用いて主観=客観の両義性を説いたことは重視しなければならないであろう。

ベルクソンが「イメージを伴う言語」に至ったのは一九〇三年の「形而上学入門」においてであるが、この論

文が『思想と動くもの』に収められるとき、或る注が付加された。それによると、イメージは少なくとも我々を具体的なものの中に止めおくことがであるという記述をあげて、「この問題になつてゐるイメージは、哲学者が自分の思想を他人に説明しようとするときに自分の心に浮かぶものである。直観に隣り合つていて、哲学者が自分自身のために必要とし、しばしば表現されないままでいるイメージは除外する」(PM, 186)とある。ヒール・ブレイユにならつて、この一種類のイメージのうち前者を「他人のためのイメージ」(les images pour autrui)、後者を「自分のためのイメージ」(les images pour soi)と名づけておくとした。ブレイユの言つように、両者を「同じ実在の最も異なつた二形態」(12)と見なすことにも異論はない。どうのく、ベルクソン自身が、二種類のイメージによば、「同一の原典を二つの違つた言語に翻訳しても、両者が同じ価値を持つとの同様、同じ価値を持つことになる」(PM, 130)と述べてゐるからである。

あらば、ブレイユは、「他人のためのイメージ」は哲学者自身が抱いていて表現されないままに留まつてゐる「自分のためのイメージ」によつて「賦活される (sont animées)」と言つてゐるが、この「賦活される」という事態は言語の場において一体いかなる事態を表わしてゐるのであるか。これまでのところ、ベルクソンの言語が述定される場合にのみ現われていたことを思えば、この「自分のためのイメージ」はしばしば表現されない状態に留まるがゆえに、いつそう重要なのではないだろうか。表現されないと、ることは、ベルクソンの文脈では述定されないと、いうことに等しい。しかし、ここで我々はベルクソンの見解に対し、言語の働きは述定されなければ現われないのかという疑問にとらわれるのである。なるほど、ベルクソン自身は自らが考へる言語は述定される場合のみ現われることを認めてゐるが、「自分のためのイメージ」というものを考へるとき、ベルクソンの意図に反して、そこに述定以前の或る言語の作用を見出すことができぬようである。これをかりに言語の前述定的作用と呼んでおくが、これは我々の経験が即自的存と直接的な接觸ではなく、既にそのようなものとして意味付がなされて、非主題的な渾沌の地平から立ち現われてくるという事態(例えば、日常的なレヴェルでは、我々は音を單なる物理的な音としてではなく、「自動車の騒音」、「不審な物音」として聞いてゐる)に単に対応するに留まらない。

さうだ、ベルクソンの場合、直観によって絶対的なるものに到達できるのであるから、「自分のためのイメージ」は絶対的なものへの「直接的な注視」を与えてくれるのである。前述のように、ベルクソンにおいては、イメージユは主観と客観との架橋であり、その架橋上を主觀の方向へ進むことによって、絶対的なるものに無限に接近することができるはずである。先に言語の前述定的作用と呼んだものは、この絶対的なるものを開示する働きにはならない。以上のような論点はベルクソン自身ほとんど意識していなかつたようと思われるが、ここに我々は彼の言語観がその形而上学に深く浸透しているのを見るのである。

(四)

さて、以上のような事態をふまえると、「イメージユを伴う言語」による表現、即ち、直喩や隠喩は直観の内容を伝えるためには回り道ではなく、かえって目的に直行することであることが判明する。メルロ・リボンティの言う「生きた言葉」という表現もここにおいてこそ妥当すると思われるが、ベルクソン自身も哲学的言語が直喩や隠喩を採り入れることによって上述の論理の拡大・柔軟化が可能であると考えていたようである。実際、ベルクソンの著作は珠玉の比喩に満ちており、哲学的營為の最初から彼は実践をもって自らの態度を示したと言えよう。

しかし、そのイメージユに関してさらに問題が待ち受けている。「イメージユを伴う言語」は我々を具体的なるものの内に止めおき、「意識を或る直観が把握されるべき点へ正確に向ける」と(PM, 158)ができたが、絶対的なるものへの無限接近の可能性を有するとはいえ、イメージユそれ自体は直観へ至る途上にある道標に過ぎない。イメージユの数を尽くしたとしても事情は同じである。というのも、到達しようとしている思惟が動きそのものであるのに対しして、イメージユそれ自体は畢竟不動なものでしかないからである。

さらに、前述のように、イメージユが直観を示唆してくれるとはいえ、読者の心に描かれるイメージユが著者の思想の中に存在していたものと異なっている場合もありうる。ベルクソンによれば、「おそらくこれら二つのイメージ

イメージは、またおそらく同じ価値を持つ他の「イメージ」同様、全部一度に現われて、哲学者の思想の発展を通じて行列をなして彼に一步一步ついて行った」(PM, 130) のである。そうであるならば、著者の思考に動きを取り戻すことによって、道標にしか過ぎなかつたイメージの間隙を埋め、著者の独自の直観へ到達することも可能なはずである。思考は本来は不可分なひとつの動きであるので、それを表現するために選んだ言葉がいかにイメージを喚起するようになつたとしても、動きが停止してしまつたのでは、そのようなイメージも単なる模造品に堕してしまうであらう。思考に動きを取り戻してやることば、言語が喚起するイメージの動きを補完する」とでもあるはずだ。

しかしながら、ベルクソンはそのような方法に關して体系的に述べてゐるわけではない。いいじゅベルクソンが提示する方法は極めて萌芽的である。思考の動きと、そのものに注目しよへば、我々は『試論』の思想圈に連れ戻される。美的感情の中でも最も単純なものとわれている優美的感情 (*le sentiment de la grâce*) といふの考察が参考になる。

ベルクソンによれば、(cf., DI, 9-14) 優美的感情とはまことに外的運動の中やの或る種の自由自在 (facilité) の知覚であり、自由自在な運動とは互いに他を準備し合つような運動であるので、我々はそれに統く運動を予見することができる。そこには、次に来たるべき運動の方向がそれに先立つ運動の中に示されている。やひど、この優美な運動がリズムにのり、音楽がそれに伴うと、我々はリズムと拍子のおかげで踊つてゐる人の動きをますますよく予見できるようになる。そこにはまず或る種の身体的共感があり、「それは精神的共感との間に親和力を有しているために、それ自体我々を樂しませるものであつて、精神的共感の觀念を微妙に暗示してゐる」(DI, 10) のである。結局のところ、優美的感情の本質はベルクソン流に言へば運動への共感であり、我々は優美なものの中に「我々に向かう可能的な運動と、潜在的あるいは生まれかかつてゐる共感との前兆を見抜いてゐる」(DI, 10) のである。

ここで我々はベルクソンの藝術論に踏みこむ余裕はないが、藝術の目的が悟性的な分別を離はせて、「暗示された

観念を実現したり、表現されている感情に共感したりする全く素直な状態に我々を連れて行くことだ」(DI, 11)とする彼の言葉には注目しておこう。反省以前の共感は我々の意識と他の諸々の意識が互いに浸透し合う可能性を証明している。そこにあるのは心理的な相互浸透の現象であるが、ベルクソンは直観のうちに意識一般を超えてさらに深く共感する能力を認めていた(cf., PM, 28)。芸術はベルクソンにあっては哲学思想と不可分であり、その普遍的例証であつたと言つても過言ではないだろう。

さて、以上のような観点に立つとき、言葉の芸術、即ち、詩に関しても事情は同じである。詩人は自分の感情をイマージュと化し、さらにそれをリズムを伴つた言葉として送り出しが、我々の方はそこからイマージュの情動的等価物である感情を感じる。しかし、「これらのイマージュは、リズムの規則正しい運動がなければ、それほど強力に再現されることはないだろう」(DI, 11)とベルクソンは言う。そこでは言葉のリズムが詩人の感情の曲線を描いており、我々はそのリズムに共感することによって初めて詩人の感情を我がものとすることができるのである。

さらに、思考の伝達に関しても事情は同じである。ベルクソンによれば、著者の思考のうねり(*les ondulations*)が我々の思考のうねりに伝えられたとき、そこにあるのは個々の言葉というよりも、むしろ言葉を貫いて動いていく意味であり、二つの精神は直接的に振動し合つてゐるのである。従つて、「言葉のリズムには思考のリズムを再する以外の目的はない」(ES, 46)とベルクソンは言う。

それならば、詩人の感情のリズムと我々の感情のリズムとの共感、思想家の思考のリズムと我々の思考のリズムとの共感が何によつて可能となるかといえば、「思考のリズムとは、思考に伴つてほとんど無意識に生まれつたある運動のリズムでなくて何であろうか」(ES, 47)と、もうベルクソンの言葉が示唆を与えてくれるだろう。この「生まれつたある運動」こそ、ベルクソンが『物質と記憶』の第一章で再認について語つた中に見出される例の「運動図式」である。この図式は我々の意識のうちに「生まれつたある筋肉感覚」(MM, 121)と、う形で進展し、著者の思考の動きを粗描する。ベルクソンによれば、我々はまや一気に意味の中へと飛躍し、次いで知覚的イマ-

ジョへと下降していくが、記憶力の奥底から呼び起される「純粹記憶」が展開して「心像的記憶」となり、次第に流れ込んでいくのがこの「運動図式」であった。

さて、それでは、この「運動図式」が思想家の思考のリズムを我々に伝え、それによって我々を独自な直観へと指し向けてくれるとすれば、そのような効果はいかなる方法によつて確かなものとされるのであるうか。ベルクソンは「朗読術 (l'art diction)」、即ち、声に出して正しく読むことがそれを可能にすると言つてゐる。読まれるページには句読点による区切りとりズムがあるが、「朗読術」の役割は「それらを正しく表し、パラグラフの様々な文章と、文章の様々な部分との時間的諸関係を考慮し、感情や思考の緩やかな強まり (crescendo) を不斷に辿つて音楽的に最高潮とされる点に至ること」 (PM, 94) にある。知性によつてニュアンスがつけ加えられるのはそのあとである。それ以前に構造および運動の知覚がなければ、ニュアンスは意味を成さない。個々の言葉を然るべく選んでも、句読点による区切りやリズムの助けを借りなければ、言いたいことは正確には伝わらない。それらに助けられて、「読む人は一連の生まれつゝある運動に導かれて、著者自身が描いているのによく似た思考と感情の曲線を描くようになる」 (ES, 46) のである。このようにして著者の精神と読者の精神とは共感し合うわけであるが、ベルクソンはこの「朗読術」と哲学的方法としての直観との間に一種の類比が存在することを指摘するのを忘れないかった (cf., PM, 95)。

結語

これまでのところで概ねベルクソンの言語観を浮き彫りにすることことができたと思われるが、そこには彼の基本的な哲学的態度が色濃く影を落としていることが窺えるだろう。最初にも述べたように、ベルクソンは言語の問題を扱つた著作やまとまつた論攷を残していない。そのため各著作においては、その時々の哲学的関心が先行し、言語に関する分析はそれをあとから追いかける形になつてしまつてゐるので、一面的であるという批判をかわせない事

情はある。しかし、彼の課題が *symbole* によって断片化・抽象化された実在の本源の姿を回復することであることを思えば、彼の言語理論をその哲学体系の中にもう一度置き直してみる必要がある。本稿はそのささやかな試みであった。

確かに、ベルクソンの言語理論には道具説とか言語名称目録説と批判されても致し方ない側面はある。しかし、それは言語発生論に関してであり、それとて現代の言語学が忘れていたる或る知見を蔵しているに見える。即ち、観念の発生と語の発生との同時性に関する指摘であるが、それは思考過程と言語との何らかの対応関係を予想させるものであり、言語の自立性を思考過程とは独立の過程として要請する現代の言語に対していくらかの示唆を与えるものであろう。さらに、ベルクソンは記憶の理論を援用して、言語の存在論的基礎をも問題にしたが、これこそまさに現代の言語学が等閑に付している問題であろう。しかし、ベルクソンの場合、前述のような言語発生論のゆえに、言語そのものによっては依然として実在を捉えることはできない。ベルクソン自身が言語は述定される場合にのみ現われると考えていたことが禍したのである。そこでベルクソンは具体的なイメージを介して実在への無限接近を企てるのであるが、この過程はいうなれば言語の前述定的作業・世界構成的作用であり、ここに彼の意図に反してではあるが、言語理論に形而上学が深くかかわっている様子を見てとることができよう。とはいって、ベルクソン自身が言語不信を乗り越えるために、「イメージを伴う言語」と思惟に動きを取り戻す「朗読術」の有効性を提示したことには変わりはない。しかし、前者に関しては、哲学の言語に比喩を取り入れることを主張したもの、比喩自体の理論的分析は何ら示されていない。我々は各著作の中に彼が紡ぎ出した珠玉の比喩を見出すのみである。一方、後者に関して、それ以上の方法論的発展はほとんど見られない。もっとも、動きへの共感ということ 자체は極めて単純な事実であるので、それ以上発展させる必要がないのも当然なのかもしれない。いずれにしても兩者相俟つて働くところに言語不信を乗り越える端緒を見出すのである。

規

(一) ベルクソンの著作からの元田豊太郎の論争を用ひ、P. U. F. 駆の頁数を示す。また、訳文中の傍点は原文
ドニイタリ、ト体でないし、お読みの方のやうに。

DI..... "Essai sur les données immédiates de la conscience"

MM..... "Matière et mémoire"

EC..... "L'évolution créatrice"

ES..... "L'énergie spirituelle",

DS..... "Les deux sources de la morale et de la religion"

PM..... "La pensée et le mouvant"

(二) 二二二回の「第一回講義」断章番号一八〇回。〔六三三回の「ハカルの思想」<和波書店>〕一〇〇頁
ムニテ用)

(三) 「精神語彙論」(新岩波講座哲學)「経験 語彙 認識」所収) による論文。古東哲明氏の著者と同じ問題意識
ド玉井コトコトのものであるが、ベルクソンの言語論を規定する所では、必ずしも「直的運動」。ベルクソンは言語と聞
かれておらず、その論放を戒して、したがって、彼の言語論を規定する所では、彼の形而下学体係るの展望が不可欠である。

(4) cf., DI, pp. 96-98, p. 123

(5) M. Merleau-Ponty, "Éloge de la philosophie", Gallimard "Collections idées", 1953, P. 36.

(6) Gilles Deleuze, "Le bergsonisme", P. U. F., 1968, p. 52 で、ベルクソンの mémoire と souvenir との原則的な
別として用いてる。前者は記憶作用を、後者は記憶されたものと意味している。本稿は、前者を「記憶力」、後者
を「記憶」として区別して用いてる。

(7) ibid., P. 52.

(8) ドニイタリの著者が等しいことを認めてる。Deleuze, op., cit., P. 63.

(9) 「五感の記憶」を認む、やがては「太古の記憶」が形成される事なる現象は、マーコ・ムーラの言語論の系譜

